

コブラ概念再考

平井 真希子

ノートルダム楽派の 2 声オルガヌムには「テノルが持続音で対声部が自由リズムの狭義のオルガヌム」、「テノルが持続音で対声部がモードリズムのコブラ」、「両声部ともモードリズムのディスカントゥス」という 3 つのリズム様式があるとされている。この解釈を初めて提示した Fritz Reckow は、ヨハネス・デ・ガルランディアの「オルガヌムには 3 つの種がある。ディスカントゥス、コブラ、(狭義の) オルガヌムである」、「コブラはディスカントゥスとオルガヌムの間にある」、「コブラではモードリズムの対声部が同音を保つテノルの上に置かれる」という記述をもとに、コブラをリズム様式の上で「狭義のオルガヌムとディスカントゥスの中間」にあるものと考えた。しかし実際の楽譜史料では、対声部がモードリズムか否かは判別困難なことが多い。すなわち、狭義のオルガヌムの部分とコブラの部分とを明確に区別することは難しいのである。

近い時代のガルランディア以外の理論書では、コブラの定義として「テノルが持続音、対声部がモードリズム」という内容は書かれておらず、むしろ「狭義のオルガヌムとディスカントゥスの間にある」という点が重視されている。またその他の部分には、コブラとは「ディスカントゥスをより良くする」、「多くの部分 (あるいは音符) からなる」、「反復進行が使われている」、「フレーズの終わりに関係する」と考えられる記述がある。さらに理論書でコブラの例としてあげられている曲の楽譜を検討すると、テノルが持続音からモードリズムに移行する部分で対声部に反復進行が使われていることがわかった。これらに基づいて、本論文では、コブラとは「狭義のオルガヌムからディスカントゥスへの移行という役割を持つ、反復進行を特徴とするような部分」を意味しているのではないかと、すなわち、リズム様式の上ではなく音楽の流れの上で狭義のオルガヌムとディスカントゥスの間に置かれるものではないかという新たな解釈を提示する。